様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７１７８

研究課題名（和文）戦後東アジアにおける国際化とグローバル化の相互作用に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Research on the Interaction of Internationalization and Globalization in Postwar East Asia

研究代表者
金　ソンミン（KIM, SUNGMIN）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：６０６００４２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、1945年以降の「グローバル化」と「国際化」をめぐるメディア、政策、法制度、産業、教育、市場、生活様式の展開が、戦後東アジア地域において文化的産物を生み出したのかを明らかにすることである。3年間の研究をつうじて、アメリカの政治的かつ経済的影響力と中核国家としての日本の役割が、東アジアの国際化とグローバル化を圧縮的に促し、東アジア諸国の文化交流と各国国内の文化的正当性の確立・変容に多大な影響をおよぼしたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the development of media, policies, legal systems, industries, education, markets, and lifestyles as cultural products that have been produced by " globalization" and "internationalization" in the postwar East Asian region. It was revealed that American political and economic clout and Japan's role as a core state pressured the internationalization and globalization of East Asia, and significantly influenced the establishment and transformation of cultural exchanges among East Asian countries.

研究分野：社会学

キーワード：国際化　グローバル化　東アジア　メディア　大衆文化

１．研究開始当初の背景

本研究は、次の三つの研究の流れを学術的背景としてもっていた。

(1) グローバル・カルチャーにかんする学際的諸研究 「グローバル化」をめぐる議論は、とりわけ 90 年代以降、一つの研究領域に縛られず、社会学、文化人類学、カルチュラル・スタディーズ、メディア研究、地理学、政治経済学など、さまざまな領域を活発に横断しながら展開されてきた。したがって、グローバル化についてはさまざまな観点や態度が存在する。本研究は、そのなかでもグローバル・カルチャーを生みだす「グローバルな圧縮のプロセス」に注目しつつ（R.ロバートソン、M.フェザーストン）、そのプロセスが、意味と表現の体制の全面的な同質化ではなく、地域と地域の間には人間や財、そして意味のフローが存在する社会的ネットワークであるという観点（A.アパデュライ、U.ハーネルズ）を受け入れ、そのプロセスが国際化をめぐる「境界」のあり方といかに葛藤・矛盾するのかを検討する。

(2) 東アジアにおける開発主義と産業的近代化にかんする諸研究 東アジアの経済成長の原因と戦略を指して提案された「開発国家」（development state）という概念（C.ジョンソン）は、日本と韓国、台湾などの東アジア諸国における経済発展の諸様を資本主義や社会主義的発展過程とは異なる第３の形態として把握し、特殊なプロセスとして説明している。その後、①国家活動の根本的目標としての経済的成長と生産の最優先、②業績主義（meritocracy）に基づいた経済官僚の充員、③産業の変化の課業があたえられた機関、④官僚と企業エリート間の緊密な関係の制度化、⑤特定の利害関係と成長を損なえる力からの保護、⑥制度化された政府−産業ネットワーク及び主要資源に対する公共の統制などの特徴をもつ開発主義が、東アジアの産業的近代化を可能にした主な要素として論じられてきた。しかしこのような開発主義の各特徴は、グローバル化を可能にした経済的基盤となった一方で、それ自体ではグローバル化を促進する動きとは多くの面で衝突してきた。つまり、戦後東アジアにおいてグローバル化と国際化がどのように相互作用したのか（P.J.カッツェンスタイン）を理解するためには、東アジアの開発主義と近代化の文脈のうえで検討する必要がある。

(3) 「東アジアにおけるトランスナショナルな文化越境にかんする諸研究 戦後東アジアにおけるトランスナショナルな文化越境をめぐる研究は、アメリカン・ヘゲモニーをめぐる共有の経験（吉見、丸川ら）やアジア諸国における日本のポピュラーカルチャーの交通（岩渕、白石ら）、東アジア諸国からの文化発信や市場の拡大（Hong, Kim ら）を中心になされてきた。しかしこれらの諸研究は、空間的にも時間的にも依然として断片的に論じられており、「アメリカニズム」の覇権的性格や「中核国家」として日本の役割、「東アジア大衆」のトランスナショナルな諸経験を「東アジアの戦後的文化空間」として総合的に論じるまでには至っていないように思われる。それは東アジアを構成してきたさまざまな条件や要素の葛藤と矛盾が充分に語られていないからであろう。「グローバル化」と「国際化」の相互作用は、その葛藤と矛盾の変容過程を歴史的かつ実証的に解明するための重要な問題なのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、1945 年以降の日本と韓国、中国における「グローバル化」と「国際化」をめぐるメディア、政策、法制度、産業、教育、市場、生活様式の展開を歴史的かつ実証的に探ることによって、戦後東アジア地域において「グローバル化」と「国際化」はどのように遂行され、どのような文化的産物を生み出してきたのかを明らかにすることである。とくに、60 年代以降の日本、80 年代以降の韓国、90 年代以降の中国の動きを重層的に比較しながら、アメリカン・ヘゲモニーの変容や「中核国家」として日本の役割、「東アジア大衆」のトランスナショナルな諸経験などを総合的に検討することで、東アジア文化研究への独創的かつ有意義な貢献を目指す。

３．研究の方法

本研究は、方法論として主に歴史的・政治経済的・社会文化的分析による「歴史化」作業と比較分析による「理論化」作業を試みる。具体的には、次のような手順を踏む。

＜理論化作業＞

(1) 文献レビューを通じて、戦後東アジアにおける「冷戦戦略」や「開発主義」「産業的近代化」 「国内政治」などが、「グローバル化」と「国際化」とどのように相互作用したのかを、グローバル化をめぐる 学際的諸研究にもとづいて考察する。

(2) 文献レビューを通じて、国家や帝国、市場やグローバル化、文明や世界 文化という枠組みの上で、東アジア地域のあり方について考察する。

(3) 文献レビューを通じて、メディア、政策 、法制度、産業、教育、市場、生活様式を総合的かつ重層的に扱う方法や理論的観点について追究する。

＜歴史化作業＞

(1) 日本や韓国、中国、アメリカの資料を通じて、戦後直後からのアメリカニズムの作用を把握し ながら、東京五輪が開催された 60 年代以降の日本、ソウル五輪が開催された 80 年代以降の韓国、市場開放が本格 化した 90 年代以降の中国における国際化やグローバル化をめぐる実践・言説を探る。

(2) 資料調査を通じて、そのような実践・言

説が東アジアの歴史的かつ地政学的条件とどのように葛藤・矛盾していたのかを軍事・政治的側 面と産業・経済的側面から考察し、社会・文化的観点から分析する。
(3) 文献レビューや資料調査を通じて、日中韓のメディア、政策、法制度、産業、教育、市場、生活様式における実践・言説をめぐる歴史的変化を考察し、 比較分析する。

＜執筆と公表＞
(1) このような文献レビューと資料調査を行いながら、多角的な構想や執筆を進める。
(2) この結 果にふまえて学会発表などの発信を進める。

４．研究成果
3 年間の研究をつうじて、アメリカの政治的かつ経済的影響力と中核国家としての日本の役割が、韓国の高度成長と産業的近代化、冷戦構造の崩壊と中国の開放などが、東アジアの国際化とグローバル化を圧縮的に促し、東アジア諸国の文化交流と各国国内の文化的正当性の確立・変容に多大な影響をおよぼしたことを明らかにした。具体的な成果は次のようにまとめることができる。
(1) 60-80 年代東アジアの高度成長と国際化による都市・観光空間の変容について国内外学会で の発表とジャーナル論文掲載を行った。
(2) 東京五輪による日本の国際化が戦後日本と東アジアのあり方に及ぼした影響について、イギリス･シェフィールド大学の Glen Hook 教授らとの国際共同研究を行った。
(3) 自ら立ち上げた「東アジア観光文化研究会」を つうじて、韓国のソウル大学、中国の中山大学とともに、日中韓共同研究および共同出版を行ったことなどがあげられる。とくに日中 韓の研究者との共同研究の成果として共編著『東アジア観光学―まなざし・場所・集団』（亜紀書房）を一読者向けに出版した。
(4) 東アジアのポピュラー音楽の形成・変容過程を国際化・グローバル化の観点からさぐり、AAS をはじめとする様々な学術大会を通じて発表した。
(5) 「音楽越境研究」「平和観光研究」などのテーマで、日中韓の研究者との学術交流を行うことで、3 年間の成果はもちろん、国際化とグローバル化の相互作用の側面からの共同研究の可能性を見つけた。

このような成果を通じて、学術的インパクトだけではなく、社会的インパクトのある研究を行うことができた。内容的には、次のような点を取り上げることができる。
(1) 60-80 年代東アジアの高度成長と国際化による観光空間の拡張が都市文化とメディアと観光を含む大衆文化のメカニズムを再構築させた。
(2) 国際化とグローバル化が国民国家の秩序と矛盾・葛藤することによって、文化的正当性と社会的規範が大きく変容し、東アジアの日常生活のあり方を転換させた。オリンピックは、そのような変容と転換をもたらしたイベントであり、それを表した現象でもあった。
(3) 国際化とグローバル化の相互作用によって、東アジアの新たな文化的ネットワークが構築され、国家のレベルとは異なる形の活発な交流を遂行してきたことなどを明らかにした。
(4) 国際化とグローバル化の相互作用を通じて、東アジアの人々が、社会的・文化的変化の受容者ではなく、そのような変化を自ら表すアクターであり、記号であることを明らかにした。

この研究の学術的かつ社会的意義は、40 年程度の短い期間に圧縮的に進行した東アジア地域の国際化とグローバル化が、都市空間のようなマクロなレベルと大衆文化のようなミクロなレベルで同時に作用した過程を探ることで、これまで国家のレベルではみえてこなかった東アジアにおけるヒト、モノ、コトの活発な交をより明らかにし、さまざまな場を借りて活発に発信したということにある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
(1) KIM,Sungmin「Japanese Tourists and the Restructuring of Seoul: Focusing on the Developments in the Gangnam Area」, Asia Review Vol.6 No.2, 査読あり（韓国語）249~268、2017。
(2) 金成玟、「東アジアの国際化・グローバル化と観光研究」『観光創造学へのチャレンジ』CATS 叢書第 11 号、北海道大学観光学高等研究センター、査読なし、79-81、2017。

〔学会発表〕（計 11 件）
(1) KIM, Sungmin「Making the “Chord of Evil”: Struggles and Norms in South Korea’s Music Industry during the Cold War」AAS 2018 Annual Conference、アメリカ・ワシントン。2018.3.23。査読あり。
(2) 金成玟「検閲から考える尹伊桑と韓国」尹伊桑生誕 100 周年記念シンポジウム－尹伊桑の「同時代」（日本音楽学会）、東京大学駒場キャンパス。2017.11.18。査読なし。
(3) KIM, Sungmin & Luli van der Does-Ishikawa「Exploiting Empowerment: Gendered songs of wartime Korea and Japan 1910-1945」Third Workshop of The European Forum on Korean-Japanese History Gender(ed) Histories of Korea and Japan 22.-24. September 2017

Fürstenzimmer/Schloss Hohentübingen, University of Tübingen, Germany.2017.9.23。査読あり。
(4) KIM, Sungmin 「Rationalization of Music in Nation-Building」Third “Memory in East Asia” Workshop “Memory of Music in South Korea and Japan”, Vevey, Switzerland, 2017.9.20. 査読なし。
(5) ENDO, Reach, KIM, Sungmin 「Reforming Japan in Tourism: GHQ Surveillance and Japanese Tourism Space, 1945-52」Tourism in Asia Ⅱ: Travelling Asia and Geographical Imaginaries, 韓国ソウル大、2017.3.24。査読なし。
(6) KIM, Sungmin「Space, Place, and Tourist−How Gangnam restructured Seoul?」, Symposium「Tourism and culture, the trace of east Asia in the world」SUN YAT-SEN UNIVERSITY, China. 2016.10.22。査読なし。
(7) 金成玟「場所のヒエラルキーと移動−現代ソウルにおける日本人観光の変容」社会情報学会、札幌学院大学、2016.9.10。
(8) KIM, Sungmin「How is “Dangerous Music” Constructed?」“Memory in East Asia” Workshop, "Memory of Music in South Korea and Japan” (White Rose East Asian Centre) イギリス Sheffield 大学、2016.8.15。査読なし。
(9) KIM, Sungmin 「Understanding Japanese Popular Culture: Terebi, Idol, and Otaku」White Rose East Asian Centre (WREAC) Post-Graduate Workshop on Academic Japanese Language Communication、イギリス Sheffield 大学、2016.1.12。査読なし。
(10) KIM,Sungmin 「Boundaries and Developmentalism: The Cultural Context of the 1965 Korea-Japan Normalization Treaty」Western Conference of the Association of Asian Studies、the University of Utah、2015.10.9。査読あり。
(11) 金成玟「観光空間としての東アジア」で、「越境のヒエラルキー−日韓の国交正常化と観光空間」東アジア観光文化研究会シンポジウム、北海道大学、2015.8.1。査読なし。

〔図書〕(計 4 件)
(1) 朴 裕河 , 上野 千鶴子 , 金 成玟 , 水野 俊平『日韓メモリー・ウォーズ《私たちは何を忘れてきたか》』弦書房、149 頁、2017.9.5。
(2) KIM, Sungmin 『Banning Japan−The History of Korean Popular Culture between prohibition and Desire, 1945-2004』Kŭl Hangari、259 頁. 2017.7.24.。(2014 年に出版した『戦後韓国と日本文化』岩波書店の韓国語版)
(3) 金成玟・岡本亮輔・周倩編『東アジア観光学−まなざし・場所・集団』亜紀書房、320 頁、2017.3.25。
(4) 金成玟、「社会の記憶」とメディア−「セウォル号」をめぐる韓国社会の「記憶闘争」」浜井祐三子編『想起と忘却のかたち』三元社、269-292、2017.3.21。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
金 ソンミン(KIM, Sungmin)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号:60600426

(2)研究分担者
( )

研究者番号:

(3)連携研究者
( )

研究者番号:

(4)研究協力者
( )